

常なる磐

つねなる いわ

令和3年3月18日(木)

◇ 卒業証書授与式に向けて④ 120年宣言と6年生

常磐東っ子120年宣言文。この宣言文のキーワードは【光】。

そして【光】6年生の名前は、【光】とつながりがある。<③の続き>

☆青山 稚己（あおやま ちみ） ☆峰澤 蒼心（みねざわ そうしん）

「稚」は「のぎへん」に「ふるとり」とで成る。「ふるとり」に「木」を加えると「集」となるように、「ふるとり」は集まるさまを表す。そして「のぎへん」は「稲」。よって「稚」は、「田に稲が実るさま」とも取れる。頭を垂れた稲穂が風にそよぐ様子は、まさに【光】の束である。稚己とは、自身の【光】なのだ。

炎は赤と「青」がある。赤色の炎は酸素不足で温度が低く、炎としては幼い。温度が高くなればなるほど、炎は「青」色となっていく。つまり、「青」は高められた色、消えない炎＝【光】なのである。さらに、体の中でめらめらと燃える「心の炎」を表すときは、「青」とともに「蒼（あお）」を用いる。「蒼心」とは、まさに、やる気を表す心の炎＝【光】を表している。

「蒼」が用いられる熟語として「蒼天（そうてん）」がある。蒼天とは、「雲がまったくない真っ青な空」を表し、「蒼」には「くもりがない」「澄みきった」様子を表す。くもりがなく、澄み切った空だからこそ、人は太陽の【光】のありがたさを感じるのである。

☆長谷川芽依（はせがわ めい）

「芽」は樹木の梢に宿る新たな生命。冬の間は身を固くして寒さをしのぎ、じっと春の訪れを待つ。温かくなると、樹木がため込んだエネルギーを全て新「芽」に注ぎ込む。これは、桜が葉をつけてから花を咲かすのではなく、花を咲かせてから葉を成長させることから分かる。「芽」は十分にエネルギーをため込み、「芽」を膨らませ、一気に花を開かせる。ため込んだエネルギーを開花に結びつけるのは、宣言文にある「努力し続けて、【光】となる」のと同じである。

「依」は「にんべん」に「衣」。よって「芽依」は、【光】である「芽」を人の手によって衣を纏わせたとも解釈できる。昔話でイメージすれば「かぐや姫」か。竹をも【光】らせ、人を幸せにするのが「芽依」である。

6年生と常磐東っ子120年宣言文のつながりは、以上。さあ、【光】となれ。